

(その三)

安政四年(一八五七年)三月 寄託文書二七八号

笠置山石垣寄進

解説 安政の大地震の三年後の文書であり地震によって崩壊した石垣の修復である。前年の安政三年には行場道普請の寄進が推進されて、約一年を経過した安政四年三月にやっと纏まった。時期からみて石垣寄進もこの行場道普請と平行して行われたのである。

末尾に石垣代として合計六百四拾弍匁となつてゐる。老坪六匁で割ると一〇七間となる。従つてこれは現在毘沙門堂の周囲を取り囲んでゐる石垣と笠置寺本坊横手の石垣を修理したものである。

最初に書かれてゐる五名が発起人であると思われる。寄付名簿を見ていくとそれぞれの収入に合わせて金持ちもそうでない者も分に依じて幅広く寄進している様子が見られる。因みに寄付に応じた人々を全て記しておく。寄進者の子孫の多くが今なお笠置町に在住している。これら山麓に住まいする多数の人々が当時の笠置寺を支えていたのである。

原文

表紙

安政四_巳立春大吉辰

笠置山石垣寄進帳

笠置山

寺中



一 石垣老坪ニ付

代六匁宛

大倉又十郎

長サ拾五間

大倉治郎左衛門

一 高サ弍間余

大倉善右衛門

右料

大倉善十郎

合 金弍百七拾目

笠岡庄次郎

合

一 金壹両

栗栖宮

森本庄三郎

石垣三坪代

一 同百疋

森本庄三郎

石垣三坪代
一 同百疋

大倉茂三郎

石垣貳坪代
一 同拾貳匁

大坂屋重次郎

石垣三坪代
一 同百疋

中西丈助

石垣三坪代
一 同百疋

大和屋勘兵衛

石垣三坪代
一 室札拾八匁

寺嶋屋庄介

石垣三坪代
一 金百疋

大倉藤右衛門

石垣貳坪代
一 銀札拾貳匁

和田屋藤七

石垣壹坪半代
一 銀札九匁

万屋作兵衛

同壹坪半代
一 銀札九匁

竹屋左四郎

同壹坪半代
一 銀札九匁

油屋弥兵衛

石垣壹坪代
一 同六匁

西村喜作

同壹坪半
一 代九匁

油屋宗十郎

同壹坪半代
一 九匁

木屋清兵衛

同老坪代
一 六匁

竹屋惣五郎

同三坪代
一 金百疋

大倉村治

同老坪代
一 六匁

大和屋重兵衛

石垣式坪代
一 銀札拾式匁

片岸藤四郎

石垣老坪代
一 同六匁

片岸藤七

石垣老坪代
一 同六匁

□榮源四郎

石垣老坪代

一 同六匁

大和屋平三郎

石垣老坪代
一 同六匁

大和屋喜四郎

石垣老坪代
一 同六匁

米屋和助

石垣老坪代
一 銀札六匁

大倉宇三郎

石坪老半代
一 同九匁

竹屋重兵衛

一 同三匁

大和屋忠四郎

一 金老朱

新屋庄兵衛

石垣老坪代
一 札六匁

左官
佐助

一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
老	老	老	老	老	式	老	老	老	三	老	老	老	札	五
匆	匆	匆	匆	匆	匆	匆	匆	匆	匆	匆	匆	匆	老	分
辻源	大和屋 嘉助	舟ノ 定四郎	谷川 清治郎	竹右	和田屋 久三郎	木引 茂兵衛	大和屋 茂七	竹や善兵衛	大工 重郎兵衛	舟ノ 文治郎	大工 六助	舟ノ 喜助	大工 新兵衛	

一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
〃	〃	札	金	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
老	式	老	老	三	老	老	五分	五分	五分	五分	老	老	老
匆	匆	匆	朱	匆	匆	匆					匆	匆	匆
〃	〃	中	舟ノ	大和や	小八	舟ノ	〃	〃	〃	浜	市	和田屋	床由
伝	清	兵	嘉	角		源	浅	源	惣	庄	庄	利	
蔵	六	助	兵	之		七	七	七	四	三	蔵	兵	
			衛	介					郎	郎		衛	

